

人が見返し対処を行う状況要因の検討

— 怒り感情喚起後の対処として、仕返し対処との比較から —

筑波大学人間総合科学研究科 関屋 裕希

筑波大学人間総合科学研究科・心理学系 小玉 正博

A study of the situational dimensions relating to the occurrence of 'prove myself' coping:
A comparison to the process of 'revenge' as a coping strategy for anger-provocation

Yuki Sekiya (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the situational dimensions of the 'prove myself' strategy (Sekiya & Kodama, 2008) which has the possibility to highlight the role of anger in 'recovering self-esteem'. This study examines two points; the first is the frequency of feeling hurt in anger-provoking situations and the second is hierarchical relationships. The study also examines these two aspects for the 'revenge' strategy. A questionnaire survey is administered to 238 university students. The results of analysis indicate that the frequency of feeling hurt has a positive effect on the tendency to use the 'prove myself' strategy. The results also indicate that the 'revenge' strategy is more difficult to adopt against a senior individual, but the 'prove myself' strategy can be taken irrespective of the hierarchical relationship.

Key words: prove myself, revenge, anger, coping

問題と目的

これまで、怒り感情喚起後の対処は、主に表出か・抑制かという観点から検討されてきた。それは、単純に怒ることだけではなく、それをどのように表現するか・処理するかが健康にとって重要な要因であるという現実に即した知見によるものだと考えられる。また、怒りの表出行動は攻撃行動と結びつきやすく、したがってその他の感情と比べて、対人関係を破壊するリスクをもっとも多く含んでいるとの理由から、怒り感情は、他の基本感情と比べて、表出の有無がより適応と関わってくると考えられた（吉田・高井, 2008）ためでもある。しかし、怒り表出・怒り抑制それぞれの適応的側面・不適応的側面を指摘する研究が混在し、表出・抑制の観点からの検討

には限界がきている。

怒り感情は一般にあまり感じたくないもの、良くないネガティブな感情として捉えられがちである。また、心身の健康に悪影響を及ぼすとする研究も数多く存在する。しかし、進化適応的視点から考えると、現在も、怒り感情が存在するのは、怒り感情にも適応的な意義が存在するためであろうと考えられる。渡辺（2004）は怒りのもつ意義を肯定的に捉え、その健全な機能の発揮を意図することによって、新しい研究アプローチが可能になると指摘している。怒り感情喚起後の対処について考えるとき、この怒りの適応的側面という観点から新たな見直しをすることができ、怒りを不適切に表に出したり、無理に抑え込もうとする対処は、怒りの良い面を生かそうとしていない対処として捉えなおすことができる。

関屋・小玉(2008)では、怒り感情喚起後の対処について、怒りの適応的側面という観点から新たな見直しを試みている。まず、怒り感情の役割・機能を検討し、怒り感情には自己防衛的行動へのエネルギーを動員する役割がある(Izard, 1991)、怒りは自分の「権限的縄張り」の侵害に対して警告・防衛的に働く(戸田, 1992)とされていることから、怒りには自己もしくは自己が関与している対象に対して何らかの損害を与えられ、傷つけられたときやそのような可能性が生じたときに、それを守る役割があると考えた。次に、怒り感情が喚起する場面を検討した研究から、他者から社会的倫理に反する行為をされたとき、他者から非難もしくは侮蔑されたとき、自分の意見や価値観を否定されたときに怒り感情が多く誘発される(鈴木・佐々木, 1994)、日常生活の中で怒りを感じる原因の多くは心理的被害による(阿部, 2002)といった知見があり、他者から非難や侮蔑をされたとき、価値を否定されたときに怒りを感じる事が多く、その自己への傷つきはすなわち自尊感情の傷つきであると考え、より日常的にみられると考えられる自尊感情の傷つきに際して生じる怒りを検討材料として取り上げた。そういった場面における怒り感情の役割・機能は他者によって自尊感情が傷つけられたとき、その傷つきを補償する役割を担うと考え、日常生活において、他者によって非難・侮蔑・否定されて自尊感情が傷つけられ、怒りが生じたときに、自身が解決するための努力行動をとることにより、自尊感情を回復する可能性のある対処として「見返し対処」を「(他者によって自尊感情が傷つけられる言動を体験した際に、)自尊感情を回復する補償行為として自己解決の方略を考え、実行すること」と定義し、検討した。「見返し対処」が怒り感情のもつ役割を發揮する適応的な対処といえるかどうかについて、怒り誘発場面や対処場面のイメージを用いた場面想定法の質問紙調査を行い、怒り誘発場面前後、対処場面後の3時点において怒り感情と自尊感情を測定し、怒り感情が喚起されたときに怒り感情を低減する効果があるか、低減した自尊感情を回復する効果があるかの2点について検討を行った。その結果、「見返し対処」は怒り感情低減効果と自尊感情回復効果の両方をもつ可能性があることが明らかになり、適応的な怒り対処である可能性が示された。

また、関屋・小玉(2008)では、人が見返すプロセスの特徴をより明らかにするため、怒り感情を緩和する可能性はあるが、傷つけられた自尊感情を守るという役割を發揮する可能性の低い対処であると考えられる行動を「(他者によって自尊感情が傷つ

けられる言動を体験した際に、)自尊感情を回復する補償行為として相手に対して何らかの直接的な返報を考え、実行すること」と定義し、「仕返し対処」として比較検討材料として用いた。その結果、「仕返し対処」には、怒り感情回復効果はあるが、自尊感情を回復させる効果はないことが示された。

本研究では、適応的な怒り対処である可能性が示された「見返し対処」について、どういった状況においてとられやすい対処であるのか、その状況要因を検討し、また、比較検討材料として「仕返し対処」についても、同様の検討を行う。

実際の状況で、人がどういった怒り対処行動をとるのかは、社会文化レベルから個人レベルまで、さまざまな直接的・間接的要因の影響を受けている。例えば、湯川(2008)では、その人が所属する文化、世代差、状況要因(怒りの原因、第三者の存在)、相手との関係性、性別、個人の生物学的・心理的特性、発達差(社会化の程度)、個人の経験、信念、怒り対処に対する認知的評価、対人目標・動機、怒り強度、環境要因(気温)、覚醒状態が挙げられている。「見返し対処」と「仕返し対処」についても、どういった状況においてそれぞれの対処がとられるかが異なると考えられる。湯川(2008)で多くの要因が示されているが、本研究においては、対人関係における基本的な要素であると考えられる怒り対象との関係性を取り上げて検討する。怒り対象との関係性については、これまで相手との親しさ(親密度)、相手との社会的な関係(立場)などを考慮した研究がみられる(平林, 1993; Underwood, Coie, & Herbsman, 1992)。感情表出の比較文化的研究で、アメリカに比べて日本では、目上の人に対してよりも目下の人に対してのほうが怒りを表出することが許される傾向が強いことが指摘されている(Matsumoto, 1990)。また、日本において、目下の人が目上の人に対して怒りを表出することは強く制限されている(工藤・マツモト, 1996)。このように、日本人は対人関係において、相手との地位関係性を重視しており、地位関係性が対人行動に影響を与える重要な要因であると考えられる。木野(2000)は、相手との地位関係性によって怒り感情喚起後の行動がどのように異なるかを検討し、目上の人に対しては、「いつも通り」といった行動をとり、怒り表出を抑制する傾向が高いこと、目下の人には「感情的攻撃」といった怒り表出をする傾向が高いことを示している。そこで、本研究においても、怒り対象との関係性の中でも、特に上下関係を取り上げる。

また、怒り感情が喚起される場面において、どれくらい傷ついたかという傷つきの程度も要因のひとつ

つとして考えられる。怒り感情は自己もしくは自己が関与している対象に対して何らかの損害が与えられ、傷つけられたときやそうなる可能性が生じたときにそれを守る役割を担うとされることが示された(関屋・小玉, 2008)。怒り感情は、自己や自己が関与する対象が傷つけられたときに生じるものであることから、怒り感情が喚起される場面における傷つきの程度も怒り対処に大きな影響をもつと考えられる。

よって、本研究では、見返し対処と仕返し対処がとられる状況要因について、怒り対象との関係性(上下関係)と傷つきの程度について検討することを目的とする。

目 的

見返し対処と仕返し対処がとられる状況要因について、怒り対象との関係性(上下関係)と傷つきの程度について検討することを目的とする。

方 法

調査対象と調査時期

関東圏の4年制国立大学の大学生238名(男性115名, 女性121名, 無記入2名)に対し、2008年10月から11月に、講義時間中の集団配布・集団回収方式により個別記入方式の質問紙調査を実施した。平均年齢は 20.47 ± 1.59 歳(mean \pm SD)であった。

調査手続き

見返し対処と仕返し対処の効果について検討するのであれば、実際場面で検討を行うのが最も適切である。しかし、そのためには他者の非難・侮蔑・否定によって自尊感情を傷つけられる経験が必要である。実験においてそのように直接的な操作を行うことは倫理的に限界がある。また、想起法による調査では、傷つきの原因となった刺激が統制できず、検討が難しくなる。そこで、今回はイメージ場面呈示による質問紙調査を行った。ただし、より明瞭に場면을イメージしてもらうため、調査者がイメージ場面についての文章を読み上げながら、質問紙への回答を進めていくという手法をとり、一般的な質問紙調査とは手法が異なる。

調査内容

本研究の質問紙は、以下の内容で構成された。

傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性について、大学生がイメージしやすいと考えられる先輩の場合・同学年の場合・後輩の場合の3種

類の怒り対象との関係性それぞれについて回答を求めた。また、見返し対処、仕返し対処に答える順序、怒り対象の順序の偏りを生じないように、カウンター・バランスをとった。

イメージ場面 まず、質問紙中に怒り誘発場面を描写した絵と文章を呈示し、自分がその状況に置かれているところ・そのときの気持ちをできるだけリアルにイメージするように教示を行った。呈示した場面内容は、渡辺(2004)を参考に、大学生にとってイメージしやすいと考えられる場面(サークルの友人から侮蔑的な発言をされる)を作成して用いた。次に、その後の状況として、①見返し対処場面(友人に対して怒りを感じ、見返すために一生懸命サークルの練習をするという場面)と②仕返し対処場面(友人に対して怒りを感じ、仕返しをするために友人に対して同じように侮蔑的な発言をするという場面)の2種類の状況を用意した。それぞれの場면을同じく絵と文章によって呈示し、イメージするように教示した。見返し対処場面の文章は怒り誘発場面と同様に先行研究を参考に作成して用いた。仕返し対処場面の文章は、怒り誘発場面に沿っており、大学生にとってイメージしやすい場면을独自に作成して用いた。それぞれの場면을表した絵については、運動部・文化部どちらの経験者でもイメージしやすいように、吹奏楽部とテニス部を題材に独自に作成したものであり、調査用紙には、両方の絵を載せた。見返し対処場面に使用した絵の一例をFig. 1に示した。呈示した文章については以下のとおりである。

怒り感情誘発場面: Aさんは、大学であるサークルに所属しています。いつものように、放課後みんなが集まって練習をしているところに、Bが通りかかりました。BはAさんが練習しているのに目をとめると、ぷっと吹き出し、“Aはレベルが低いなあ、練習したって無駄なんじゃないの”と言って、そのまま笑いながら立ち去ってしまいました。

見返し対処場面: Aさんは、笑いながら去って行ったBに強い怒りを感じました。そして、“Bを見返してやろう、Bよりも上手くなってやろう”と心に決めました。その後、Aさんは今までも増して一生懸命練習に取り組みました。非常に集中していたので、いつもの練習終了時間をだいぶ過ぎてから、やっとそのことに気づいたほどでした。練習を終え、Aさんは家へ帰ることにしました。

仕返し対処場面: Aさんは、笑いながら去って行ったBに強い怒りを感じました。そして、“Bも同じような目にあわせてやろう”と心に決めました。その後、AさんはBが練習しているところに通りかかり、Bに言われたことと同じことを言って立ち去りました。

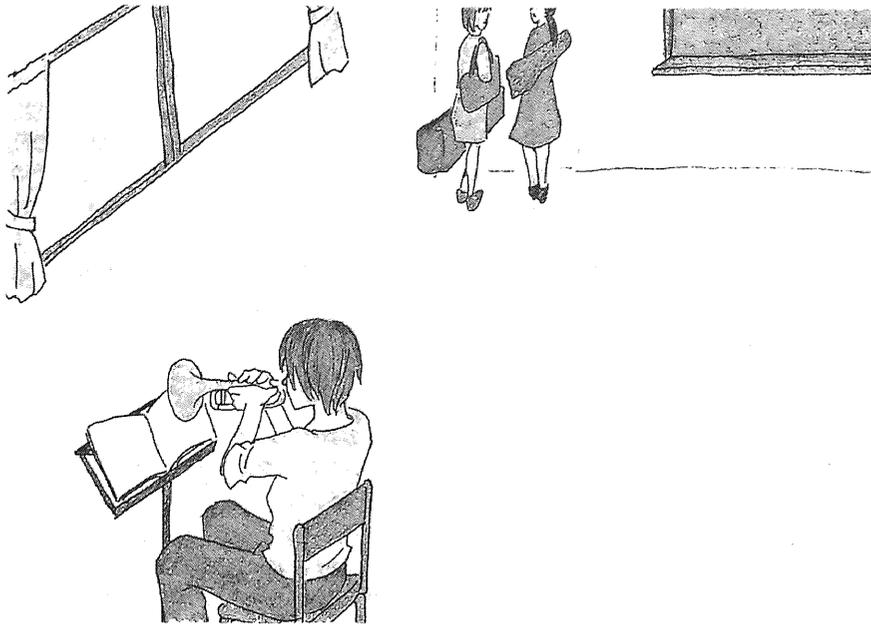


Fig. 1 見返し対処場面に使用した絵の一例

傷つきの程度 怒り誘発場面を絵と文章によって呈示し、その場面を実際に経験したとしたら、どれくらい傷つくかについて、1項目5件法（“1. 全く傷つかない”，“2. あまり傷つかない”，“3. 少し傷つく”，“4. 傷つく”，“5. かなり傷つく”）で回答を求めた。得点が高いほど傷つきの程度が大きいことを示す。

見返し対処志向性 見返し対処場面を絵と文章によって呈示し、怒り誘発場面を経験した後に、呈示した対処と同じ行動をどのくらい行いそうかについて7件法（“1. 全くしない” - “7. 必ずする”）で回答を求めた。得点が高いほど見返し対処志向性が強いことを示す。

仕返し対処志向性 仕返し対処場面を絵と文章によって呈示し、怒り誘発場面を経験した後に、呈示した対処と同じ行動をどのくらい行いそうかについて7件法（“1. 全くしない” - “7. 必ずする”）で回答を求めた。得点が高いほど仕返し対処志向性が強いことを示す。

結 果

分析対象者

記入漏れや記入ミスのあった回答を除き、有効回答者合計208名（男性97名、女性111名）が分析の対象とされた。平均年齢は、 20.47 ± 1.59 歳(mean

\pm SD)であった。

男女間の各得点の差

関屋・小玉(2008)において、仕返し対処のもつ効果に男女間で差があったことから、各怒り対象への傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性の得点に男女差が見られるのかを t 検定によって検討した。その結果、怒り対象が先輩の場合の傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性において有意差が見られ(Table 1)、傷つきの程度と見返し対処志向性は女性の得点が高く、仕返し対処志向性は男性の得点が高かった。このことから、傷つきの程度と対処志向性との関連についても男女差が見られる可能性が考えられるため、以下、男女差も考慮に入れて検討することとした。

男女別に見た傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性の内的整合性

傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性の各得点について、怒り対象ごとの得点を合計して用いることが可能かどうかを確認するため、それぞれの内的整合性を男女別で検討する。そのために、各尺度について信頼性分析を行い、 α 係数を算出した。その結果、男性における傷つきの程度の α 係数は.74、見返し対処志向性の α 係数は.81、仕返し対処志向性の α 係数は0.81であり、女性におけ

Table 1 傷つきの程度と、見返し対処志向性と、仕返し対処志向性の平均値、標準偏差、及び男女差×怒り対象との関係性の分散分析結果

	関係性	男性	女性	t 値	分散分析結果			下位検定
		M	M		性別	関係性	交互作用	
傷つきの程度	同学年	3.51 (1.24)	3.68 (1.07)	1.11				
	先輩	3.26 (1.39)	3.61 (1.04)	2.07*				
	後輩	3.82 (1.31)	4.04 (1.15)	1.24				
見返し対処志向性	同学年	5.14 (1.70)	5.34 (1.64)	0.85				
	先輩	4.79 (1.69)	5.37 (1.58)	2.54*	3.08 †	1.11 <i>n.s</i>	1.61 <i>n.s</i>	
	後輩	5.00 (1.92)	5.30 (1.81)	1.15				
仕返し対処志向性	同学年	2.57 (1.79)	2.23 (1.47)	1.50				男性：同学年・後輩>先輩
	先輩	1.99 (1.66)	1.33 (0.93)	3.46***	4.37*	36.34***	2.90 †	女性：同学年・後輩>先輩
	後輩	2.52 (1.94)	2.34 (1.64)	0.70				先輩：男性>女性

() は標準偏差

注) † $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

る傷つきの程度の α 係数は .66, 見返し対処志向性の α 係数は .84, 仕返し対処志向性の α 係数は .73 であった。女性における傷つきの程度の α 係数がやや低めであるが、おおむね内的整合性は高いといえる。

男女別に見た傷つきの程度が見返し対処・仕返し対処志向性に与える影響の検討

上記の分析により、傷つきの程度、見返し対処志向性、仕返し対処志向性の内的整合性は高いことが示された。そこで、傷つきの程度得点、見返し対処志向性得点、仕返し対処志向性得点として、怒り対象ごとの得点を合計した得点を用いて、傷つきの程度が見返し対処志向性と仕返し対処志向性に与える影響について、男女別に分析を行う。

まず、男性について傷つきの程度が見返し対処志向性に与える影響を検討するため、傷つきの程度を独立変数、見返し対処志向性を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .032$, 10%水準で有意傾向であった。また、標準化係数を見ると有意傾向であった ($\beta = .180$, $p < .10$)。同じく男性について、傷つきの程度が仕返し対処志向性に与える影響を検討するため、傷つきの程度を独立変数、仕返し対処志向性を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .000$ で有意でなかった。

次に、女性について、傷つきの程度が見返し対処

志向性に与える影響を検討するため、傷つきの程度を独立変数、見返し対処志向性を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .267$, 0.01%水準で有意であった。また、標準化係数を見ると有意な値 ($\beta = .517$, $p < .001$) であった。同じく女性について、傷つきの程度が仕返し対処志向性に与える影響を検討するため、傷つきの程度を独立変数、仕返し対処志向性を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .001$ で有意でなかった。

男女別に見た怒り対象との関係性が対処志向性に与える影響の検討

怒り対象との関係性によって見返し対処志向性に差異があるかについて男女差を考慮に入れて検討するため、同学年、先輩、後輩に対する見返し対処志向性得点において、怒り対象との関係性 (同学年、先輩、後輩)、性別 (男性対女性: between) の 3×2 の 2 要因の混合計画分散分析を行った (Table 1)。その結果、交互作用は有意ではなかった。主効果の検定を行ったところ、怒り対象との関係性の主効果は有意ではなく、性別の主効果が有意傾向であり ($F [1,206] = 3.08$, $< .10$), Bonferroni 法による多重比較の結果、女性のほうが男性よりも見返し対処志向性が 10%水準で有意に高い傾向がみられた。

次に、怒り対象との関係性によって仕返し対処志

向性に差異があるかについて男女差を考慮に入れて検討するため、同学年、先輩、後輩に対する仕返し対処志向性得点において、怒り対象との関係性（同学年、先輩、後輩）、性別（男性対女性：between）の3×2の2要因の混合計画分散分析を行った（Table 1）。その結果、交互作用が有意傾向であったため（ $F [1.91, 398.88] = 2.90, p < .10$ ）、単純主効果の検定を行った。その結果、男性における怒り対象との関係性の単純主効果が有意（ $F [2,205] = 8.22, < .001$ ）であり、Bonferroni法による多重比較の結果、男性において同学年に対する仕返し対処志向性のほうが先輩に対する仕返し対処志向性より0.1%水準で有意に高かった。また、男性において後輩に対する仕返し対処志向性のほうが先輩に対する仕返し対処志向性より1%水準で有意に高かった。また、女性における怒り対象との関係性の単純主効果も有意（ $F [2,205] = 26.48, p < .001$ ）であり、同学年に対する仕返し対処志向性のほうが先輩に対する仕返し対処志向性より0.1%水準で有意に高く、後輩に対する仕返し対処志向性のほうが先輩に対する仕返し対処志向性より0.1%水準で有意に高かった。また、先輩における性別の単純主効果が有意（ $F [1,206] = 12.84, < .001$ ）であり、Bonferroni法による多重比較の結果、先輩においては男性のほうが女性よりも仕返し対処志向性が0.1%水準で有意に高かった。

考 察

本研究の目的は、見返し対処と仕返し対処がとられる状況要因について、怒り対象との関係性（上下関係）と傷つきの程度について検討することであった。

傷つきの程度が対処の志向性に与える影響

傷つきの程度が対処の志向性に与える影響を検討するために、怒り対象ごとの得点を合計した傷つきの程度得点、見返し対処志向性得点、仕返し対処志向性得点を用いて、傷つきの程度得点を独立変数、見返し対処志向性得点と仕返し対処志向性得点を従属変数とした単回帰分析を男女ごとに行った。単回帰分析の結果、男性の場合も女性の場合も、傷つきの程度が大きいほど見返し対処をしやすいたことが示された。ただし、傷つきの程度が見返し対処しやすさに及ぼす影響は男性よりも女性の場合の方が大きく、男性においては、傷つきの程度が見返し対処しやすさを説明する程度はかなり小さいため、他にも多くの要因があると考えられる。一方、仕返し対処

のしやすさについては、男性でも女性でも傷つきの程度が影響しない可能性が示された。大淵・小倉（1985）は怒りの動機を検討し、プライド損傷が原因で怒りが生じた場合には、相手に苦痛を与えることを目的とする敵意的動機が生じないという結果を得ている。本研究では、サークルの友人から侮蔑的な発言をされるという怒り誘発場面を呈示しており、本研究もほぼ同じ知見を示しているといえる。これらの結果から、仕返し対処がとられる場合には、どれくらい傷ついたかは関係しないが、見返し対処がとられる場合には、怒り誘発場面における傷つきが大きいことが分かった。つまり、人はひどく傷つけられた時に、見返ししようとする傾向が高まるといことが示唆された。

怒り対象との関係性が対処の志向性に与える影響

怒り対象との関係性が対処の志向性に与える影響を検討するために、怒り対象との関係性、性別を独立変数、対処志向性得点を従属変数として2要因混合計画の分散分析を行った。主効果や単純主効果が有意であった部分について、多重比較を行った結果、以下のことが明らかになった。

男性においても女性においても怒り対象が同学年であるか先輩であるか後輩であるかによって見返ししやすさに違いがないことが示された。仕返し対処については、男性・女性とも、怒り対象が先輩の場合、後輩や同学年に対してよりも仕返ししづらいたことが示された。このことは、目上の人に対しては怒り表出を抑制しやすいとした工藤・マツモト（1996）や木野（2000）の知見を支持する結果が得られたといえる。Conway, Di Fazio, Mayman（1999）が規範意識と感情表出との関連を検討し、低地位の人が高地位の人に対する場合には、高地位の人が低地位の人に対する場合よりも、感情を抑制すべきという規範が働くことが確認されており、日本においても同様の規範があるものと考えられる。一方、見返しすることについては男性においても女性においても、怒り対象との関係の地位の違いは関係しておらず、これは見返し対処が怒り感情を直接相手に表出する対処ではないためだと考えられる。

以上のことから、傷つきの程度が大きい場合に見返ししやすさが強まること、傷つきの程度は仕返ししやすさには影響しないこと、また、目上である先輩に対しては仕返ししづらいたが、見返しは怒り対象との関係性が違っても、対処のとりやすさに違いがないことが示された。

今後の課題

本研究の結果、見返し対処は傷つきの大きい、精神的負担の大きい場面においてとられやすく、また、怒り対象との関係性に関係なくとることのできる対処であることが示唆された。しかし、対処志向性に影響する状況要因は他にも多く考えられ、今回取り上げた傷つきの程度と関係性以外にも検討する必要がある。特に、見返し対処は傷つきの大きい場面でとられやすいことが示唆され、その状況にどれくらい自分がコミットメントしているかというコミットメントの程度や、自分にとってその文脈や内容がどれほど重要なものかという目標関連性などを検討することが有用であると考えられる。

引用文献

- 阿部晋吾 (2002). 怒り表出の対人的効果とその規定因に関する理論的検討 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 56, 111-122.
- Conway, M., Di Fazio, R., Mayman, S. (1999). Judging others' emotion as a function of the others' status. *Social Psychology Quarterly*, 62, 291-305.
- 平林秀美 (1993). 感情表出のコントロールに対する認識—表出対象によるコントロールの差異を中心に 日本教育心理学会総会発表論文集, 35, 14.
- Isard, C.E. (1991). *The psychology of emotions*. NewYork: Plenum Press.
(イザード, C.E. 莊巖舜哉監訳／比較発達研究会訳 1996 感情心理学 ナカニシヤ出版)
- 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, 70 (6), 494-502.
- 工藤・マツモト, D. (1996). 日本人の感情世界—ミステリアスな文化の謎を解く 誠信書房
- Matsumoto, D. (1990). Cultural similarities and differences in display rules. *Motivation and Emotion*, 14, 195-214.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1985). 怒りの動機—その構造と要因及び反応との関係 心理学研究, 56 (4), 200-207.
- 関屋裕希・小玉正博 (2008). 怒り感情の鎮静には見返しが有効か、仕返しが有効か? 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 1023.
- 鈴木常元・佐々木雄二 (1994). 不安, 抑うつ, 怒りの感情誘発場面の分析 筑波大学心理学研究, 16, 255-262.
- 戸田正直 (1992). 感情一人を動かしている適応プログラム 認知科学選書 24 東京大学出版会
- Underwood, M.K., Coie, J.D., & Herbman, C.R. (1992). Display rules for anger and aggression in school-age children. *Child Development*, 63, 366-380.
- 渡辺俊太郎 (2004). 怒り感情が心身の健康に及ぼす影響に関する研究 筑波大学院心理学研究科平成 15 年度博士論文 (未公刊).
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 怒り感情の制御に関する調整要因の検討: 感情生起対象との関係性に着目して 感情心理学研究, 15 (2), 89-106.
- 湯川進太郎編 (2008). 怒りの心理学—怒りとうまくつきあうための理論と方法 有斐閣
(受稿 9 月 30 日: 受理 10 月 20 日)